



ながら、まきを探しに、そして、みきとまゆみを探しに、すでに街灯の灯った道を、やみくもに、走りだしたのでした。ゆきはなんだか気味悪くなって、天守閣をおりと、やっぱりひとりじめなんかしようと思わなきゃよかった、と後悔した。

「そのあとずっと、人形は「やっとたどりついたぞ」「よかつた……。やっとたどりついたぞ」と、くりかえし続けました。よかつた……。やっとたどりついたぞ」と、おんなじ台詞をくりかえしているだけです。

「まゆみのとなりで、人形は、今にも立ち上がりそうできて、しかしいつこうに、動く気配すらありません。ただ、ずっとよかつた……。やっとたどりついたぞ。これで、何もかも、すっかり解決するぞ」

「人形なのではないか、と思ったのです。をちらつと見て、ちよつとおかしいな、と首をかしげました。もしかしたら、この人形は、さっきの人形とはまったく別のそこまですべて、ふと、ゆきはしゃべるのを、やめました。そして、手もとの、おかしが十億個人入っているという箱人です」

「もちろん、あるわ。一昨年の夏休みに、姉妹で行ったもの。姉妹っていうのは、さっきの、まきと私とみきとまゆみの四気味な影が深く横切っていました」

「腰かけたままちよつとも動かないで、人形は、ゆきにたずねました。きつと照明のせいでしょう、その若作りした顔に、不そこには、洞窟は、ありますか……」

「そういいますと、高松港からフェリーに乗れば二十分くらいで着くことを、ゆきは、教えてあげました。なあんた、そんなこと」

「鬼が島に行きたいんだけど、どう行ったらいいのかわからなくて……。このあたりだと、聞いてきたんですが……」

「これで、よし、と」

「つまみをねじって、かつてに音量を調節してしまいました。相手がさっきの人形だとわかると、ゆきはもう慣れた手つきで、さつさとポケットからカセットプレーヤーを取り出し、

声が大きいのは、カセットの音量が大きくなっているからです。ゆきは思わず、あつと叫びそうになりました。さっきの、人形、です。若作りしていますけれど、まちがいありません。お嬢さん。すみません。お嬢さん。すみません」

「お嬢さん。すみません」と、また、くりかえしました。その声は、どこかで聞いたことが、ありま

「つきました。ゆきのとなりにはいつの間にか、ひとりの男が座っていました。男はきわめてまじめな顔をして、ゆきを見つ

「うつすらと眠りかけていたところを、いきなり、男の大きな声で起こされました。ゆきはびっくりして、壁に背中をくっ

「お嬢さん。すみません。ちよつとおたずねします。お嬢さん。すみません」

「はがっかりして、近くの椅子に腰かけました。そういえば、もうずっと立ちっぱなしでした。けれども、不思議なことに、展望台を何回行ったりきたりして、いつこうに森なんか、見つからないのでした。ゆき

「こんなに見晴らしのよい場所からでしたら、あつという間に発見できるにちがいません。さあて、森はどつちかしら」

「だちのおかしを食べてしまつつもりなのです。見つからない、吊り橋をわたつて最初に現れるという森を、発見するつもりだったので。ゆきは、たったひとりでお

「展望台にのぼっていったのは、ゆきなりのわけがありました。ゆきは、この展望台で、さつきから探しているのにまだ

「まあ、すばらしいながめだこと」

「ゆきは大切そうに、人形からあずかった、おかしが十億個人入っているという箱を抱え直しますと、のっしのっしと満足げ

「息も切れ切れ、ゆきがたどりついたのは、大きな大きな、お城、でした。ここまですべて、もう、安心だわ」

「こにもありません。で、逃げている、といったほうが正確なくらいです。そういえば、ゆきのそばには、さつきまで一緒だった、まきの姿はど

